

ブトオール市における「スクンバシ」

—— 開発・移住・「スクンバシ」 ——

ラジェシュ・プラダナンガ

〈はじめに〉

本稿はネパールの一地方都市における土地なしあるいは土地なしに近い住民で公共地を占拠する「スクンバシ」の問題を検討しようとするものである。調査の対象としたのは、ネパールの西部開発地区ルンビニ県ルパンデヒー郡の北部に位置するブトオール市である（地図1）。

本題に入る前にスクンバシという語源について述べ、次にネパールの地理的な条件、社会構造及び行政について述べておきたい。

Sukumbasi という言葉は、農村地域において盛んに使用されているネパール語である。Sukum という意味は土地や家とか何も持たない状態、basi は移住者または住民を意味する言葉である。Turnerによれば、Sukumbasi とは「職あるいは食糧を持たない者あるいは明確な生活手段をもたない者」である。しかし、Sukum はプレークリット語sukkaの複数形であるから、Sukumbasiは「快適に暮らす者」を意味することになる。仏教では無一物で執着なく暮らすことが幸福の条件と考えられたが、物質文明の近代世界では無一物の状態が不幸の条件となり、こうした価値観の変化によって、Sukumbasiの意味が180度変化したことと考えられるなら、興味深い。ともあれ、この論文では、Sukumbasiはブトオール市の住民の中で認識されている「空き地に占拠する人々」を意味する。

ネパールはアジア大陸の大國である中国（チベット）とインドに挟まれた内陸の小国である。面積は14万7181平方Km.、東西は885Km.、南北は平均193Km.である。標高は最高8848m.、最低61m.で、南北の幅わずか193Kmの間に標高差が8000m.以上もある。ネパールの国土を標高差で大きく区別すると、山岳地帯（海拔3000~8848m）、丘陵地帯（海拔300~3000m）とタライ地帯（海拔61~300m）になる。

社会的には四方八方から様々な民族が流入して、高い尾根と深い谷の間の小さな盆地に小さな世界を造り、独自の文化、伝統、言語を継承してきた国である。東北からチベット・ビルマ語系の諸民族が移住し、南西からはインド・ヨーロッパ語系の諸民族がさまざまな時代にさまざまな規模で波状的に入り込み、先住民と混血しながらも、もともと持っていた文化・言語を維持し、地理的高度と谷を住み分けしてきたのである。多くの宗教がありながら互いに争わず、ヒンドゥー教徒と仏教徒が同じ寺院で異なる神の名を唱えながら、それぞれに礼拝をしている。

以上に述べたような特徴をもつネパールにおいて、「スクンバシ」とは、最近の現象ではなく、今世紀初頭から起きていた。しかし、60年代以降それは深刻化して「スクンバシ問題」を形成するようになってきた（Regmi,M.C.,1979,Kalpan,P.F.&Shrestha,N.R.,1982,Ojha,D.P.,1983）。

本稿では、全人口の81.1%は農業に従事し、91%は農村部に居住しているネパールのタライ地帯を中心に深刻化している「スクンバシ」問題を、郡単位ではなく、ブトオール市という地方小都市が抱えている問題として検討してみたい。

ブトオール市における「スケンバシ」

第1章ではブトオール市の背景を述べ、人口及び社会構造を明らかにし、職業の変化を分析してみたい。第2章ではブトオール市における移住形態を分析し、それを踏まえてスケンバシについて検討する。第3章では現地調査をふまえてスケンバシの生活について述べることにする。

全体として、今後ますます深刻化する可能性が高い「スケンバシ問題」を扱う研究の基礎を築くことを目的としている。

1. ブトオール市の歴史と現状

ブトオール市は、ネパールの西部開発地区、ルンビニ県¹、ルパンデヒ郡の北部に位置し、ツレー山脈の麓にあり、郡内で一番人口の多い都市（5万58人）²である。2つの重要な国道（東西幹線道路及びシダルタ国道）が交わる交通の要所でもある。東、西、北はツレー山脈に囲まれ、東部はデヴァダハ村、西部はパーロハ村、北部はドヴァン村及びパルバ郡、南部はシャンカル・ナガール村、モティプール村、セムラル村と隣接している。

ブトオール市は西部開発地区の南部にあり、「タライ」平原地に位置し、標高は183メートルである。この町は気候的には亜熱帯気候に属し、夏の気温は35度から48度まで上昇し、大変暑い。その一方で冬には18度から7度まで下がり比較的過ごしやすい³。

地質的には、町の北部は石が混入する土壌で、非常に硬質であるため、農業生産には不向きである。中央部では、土が交じってくるために野菜の生産は可能である。南部は灌漑施設が整っており、稻作が可能な農業生産には最適な土地である⁴。

ブトオールという地名の由来にはいくつか説がある。ある説によれば、釈迦の生母マヤ・ディーの実家は、ブトオールより東南部およそ9kmのデヴァダハ村にあったという。そのため、"Buddha Walli" (बुद्धवली) と言われ、後に "Budawali" → बुधवली → बतौली のように変化して "Butwal" ブトワル になったという。

別の説では、中世にこの町は交易地域として発達し、周辺地域からこの地域に生活用品が収集されたために、"Batulne" (収集) から "Batauli" と言われた⁵。もう一つの説は、1815年、4000人の派遣英軍⁶がパルバと戦争するためにインドのゴラクプールからやってきて、見わたす景色に山しかなかったので、"nothing but wall" と述べたことから、この地は英語の"but wall" で呼ばれたのが訛って、"Butwal" になったという説である。にわかには信じがたいが、面白い説である⁷。

歴史的には、パルバ王ムクンダ・セーナ（1518-1553年）⁸が出家し、長男マニキヤ・セーナにパルバ、次男ビナヤカ・セーナにブトオールを割り当てたことから、小国家として台頭した。4代後のアンバル・セーナの時代にパルバ王朝が途絶え、ブトオールとパルバは合併した。合併後、ブトオールはパルバの一部として支配された。この時代に、タンセヌは夏の宮殿、ブトオールは冬の宮殿として使用された。このようにブトオールはパルバの支配下にあったり、ある時は、独立した小国家として存在したりしたことが理解できる。1962年4月、全国を14県(Zone)75郡(District)に区分する行政再編が実施され、1973年には、国と県の間に4つの開発地区(Development Region)が設けられた。その後、1980年には極西部開発地区を中西部と極西部の2つに再分割して、5つの開発地区に行政再編された。この中で、住民にとって最も実体がある行

政単位は郡である（1980年の政治運動以前は県単位だった）。さらにこれらの郡の下に4040(1992年)市町村が存在する。現在プトオールはルパンデヒ郡に所属し、県の行政上の中心になっている（地図1と2を参照）。

プトオール地域の住民はほとんどパルバの人々だったが、プラタブ・シャムシェルの時代（1930前後）⁹に、インドのテンダ地域からムスリムが連れて来られ、主に交易に従事し、彼らの居住地はテンダ居住地域と呼ばれた¹⁰。このインドからの移住民にはムスリムの他にマルワリも見られた。この時代、プトオールにはパルバから移住してきた移住者だけが居住していた。彼らの居住地域はティナウ川の西部に限定されていたのである。しかし、1945年には居住地域がティナウ川の東部へ拡大し、カショウリという名で知られるようになった。カショウリにはパルバ以外に、バグルン、グルミ、シャンジャ、カスキからも移住者がやってきた。現在でも現地の人々の間ではプトオールとカショウリが異なる居住区として認識されている。

プトオール市は古代から現在に至るまで、主に山間部と平原地を結ぶ交易地の機能を果たしてきたと言ってよい。なぜなら、西部山間及び丘陵地域へ食料を運送するときには、必ずこの地域を通らざる得ないからである。丘陵地帯の人々は最低限の生活用品を手に入れるために「タライ」さらには国境を越えてインドまで出かける¹¹。国道が建設される以前、丘陵及び山間地域への荷物は、人間あるいは動物を使用して運ばれた。南北で最も使用されるルートはタンセヌ=プトオールを経由し、冬期ごとにおよそ40000トンの荷物を運送し、そのため毎日およそ5000人が使用されていたと推測されている(Hagen, 1965:170)。食料品の不足によって輸入品に対する要求を高まり、その結果として、交通量は著しく増加した(Blaikie, 1980:167)。このような経緯があって、プトオール市は商業都市として発展してきたのである。

1967年にシッタルタ国道が完成し、特に西部地域への交通の便が良くなり、頻繁に人々や貨物がするようになった。この結果として、国道に沿ってBhairahawa からPokharaの間に新街区が開発された。

このように基本的には商業都市であるが、プトオール市はルンビニ県の中心都市であったために、行政上の役割も大きく、主な役所や会社、病院、銀行、教育機関などが集中している。そのため、ある程度インフラも整備されている。プトオール市はネパールの代表するほどの都市ではない。しかし、西部開発地区にあっては重要な役割を果たしている現代的な都市であるといってよいだろう。

人口及び世帯：

1991年の国勢調査によると、プトオール市の人口は4万4272人で、その内訳は男性2万2993人（51.94%）と女性2万1279人（48.06%）である。世帯数は9196世帯で¹²、一世帯は平均4.1人になる。

表1-1、表1-2は1991年の国勢調査に基づいており¹³、9つの地区からなっていたが、その後、隣のターム・ナガル村（表1-2）と合併して15地区に拡大した(1-3)。第1地区から第7地区までは従来どおりであるが、第8地区は細分されて第8から11の地区となった。第9地区は第12区と第13区となった。ターム・ナガル村の第1地区から第5地区までは合併して新たに第14地区となり、残りの第6地区から第9地区までは第15地区となった。この合併の結果、プトオール

ブトオール市における「スケンバシ」

市の人口は急増した（表1-3）¹⁴。もっと、1991年から1994年の間に第1地区から第7地区では第1区、第4区、第5区を除いて、人口は5.21%から47.99%の減少を記録している（表1-4）。この減少が新地区への移住によるのか、あるいはその他の土地へ移住したのか、それともは自然減少であるか、その原因は明らかではない。

一方、ブトオール市役所の1995年の統計によると、定着人口は5万2875人、短期滞在者は8932人で、総人口は6万1807人となっている¹⁵。ここで言う短期滞在者とは、行政上の仕事で出張してきている者、学生及び大学関係の職員および短期間会社に出張してきている者などを示す¹⁶。

さて次に、ブトオールの人口密度を見ることにしよう。

ティナウ川の西側にある第3地区の人口密度が非常に高い（122.78/ha）。2番目に人口密度が高いのは第7地区である。しかしながら、第14地区と第15地区は合併された新地区であり、主に農業に従事しているから、当然ながら人口密度は最も低い¹⁷。

ブトオール市の土地利用状況は次の通りである。森林は5790.22(72.8%)ヘクタール、農業地は1240.76(15.6%)ヘクタール、住宅及び商業地は278.38(3.5%)ヘクタール、行政地は135.21(1.7%)ヘクタール、その他は453.36(5.7%)ヘクタールである¹⁸。

ブトオール市に関するサンプル調査¹⁹（210世帯）によると、男性は658人（51.4%）、女性は623人（48.6%）であり、男性人口が女性人口をやや上まわっている。次に、年齢別人口構成を見ると、年齢別で15歳未満が37.3%、16歳から60歳までが58.7%は、60歳以上は残りの4%である。

エスニック・グループ²⁰別に見ると、ネワル（26.7%）、チエトリ（17.1%）、プラマン（18.1%）マガル（15.2%）、グルン（8.1%）、マルワリ（2.9%）、ムサルマン（1.9%）、タール（1.4%）、カミー、ダマイ、サルキ（2.4%）とその他（6.2%）である。

宗教別人口はヒンドゥー教徒89%、仏教徒8.6%とイスラム教徒1.9%、キリスト教徒0.5%である。

市概況調査中、対象となる世帯の家長から聞き取りが行われたが、誕生以来この地域に住んでいる人々が43%なのに対し、他の地域から移住してきた者は57%に達している。移住者の内訳は、5年以内の者は15.9%、6～15年の者は44.1%、16～30年以上は40%である。移住者中3分の1（33.3%）はパルバからの移住者である。その他は、グルミからが11.7%、バグルンからが8.3%、シャンジャからが7.5%、パルワトからが6.7%、ミャグディからが3.3%とカトマンドゥ盆地からが5.8%、他の丘陵地帯からが8.3%、タライ地域からが8.3%、インド及びビルマ（ミャンマー）からが6.7%である。

母語別人口は、センサスによると、ネパーリが70.7%、マイタリ0.4%、ボージプリー1.7%、ネワリー10.6%、グルン2.9%、タマン0.2%、タール0.5%、マガル3.9%、ライ・キラティー1.4%、タカリ0.2%、ヒンディー6.0%、ウルドゥ0.8%、英語0.1%である²¹。ところで、現地調査の際、客観的にみたとき、支配層はネワールであったが、ネワールであってもネワーリを話せないケースもしばしばあった。

10歳以上の人口と、彼らがどのように経済に活動をしているかを1981年と1991年のセンサスのデータに基づいて分析してみよう（表1-5）。

1981年に10歳以上の人口は1万5737人（100%）であるが、そのうち経済的に活動している人口は6726人（42.7%）で、活動していない人口は9011人（57.3%）である²²。同様に、1991年に10

歳以上の人口は3万2454人（100%）であり、そのうち活動している人口は1万1641人（35.9%）に過ぎない。

1981年と1991年では、経済的に活動している人口は6726人と1万1641人のうち、職業別分析すると、専門・技術職は175（2.6%）と583（5.0%）で、行政職は71（1.1%）と231（2.0%）、事務職は446（6.6%）と581（5.0%）、商業は1282（19.1%）と3012（25.9%）、サービス業は155（2.3%）と2577（22.1%）、農業及び漁業は2690（40.0%）と830（7.1%）、生産労働者（農業以外）は1024（15.2%）と3050（26.2%）、職業申告なしは883（13.1%）と777（6.7%）である。

以上から、ブトオール市では職業の変化が生じていることがわかる。1981年では農業・漁業（40%）が重要な職業だったが、1991年にには著しく減少（7.1%）している²³。1981年と1991年の間にいろいろな職業、例えばサービス業は2.3%から22.1%に増加している。また農業・漁業以外の生産労働者は15.2%から26.2%へ、そして商業は19.1%から25.9%へと増加している。ブトオール市は明らかに農業中心の町から、第2次、第3次産業を中心とする現代都市へと変化しつつあるといえよう。

人口増加率は、国勢調査(Census)によると次の通りである。

1952/54の国勢調査によると当時この地域の人口は2597人²⁴で村に過ぎなかつたが、1960年には約8000人に達し、村から市（1956年）になった。1952/54年から1981年の間に1万9986人が増加し、パーセントで言えば769.6%になり、人口増加率は8.3%で、2万2583人になっている。そして、81年と91年の間に2万1689人が増加し、4万4272人になった（9つの地区で）。1971年から1991年までの人口増加率は5.87%と6.97%である。

この統計が取られた1991年の国勢調査では、ブトオール市は9つの地区だけであったが、その後、ターム・ナガル村（以下T村と略す）を本市に合併し、両者の人口を併せると1991年時点で、5万58人になった。T村を合併する以前の人口増加率は1971年と1981年の間は5.87%で、1981年と1991年の間は6.97%である。ところで、国全体の人口増加率は2.5%前後にとどまっている。このように本市の人口が著しく増加している原因はなんであろうか。自然増加だけではなく、他地域からの移住を想定せざるを得ないように思われる。原因がもし移住であるなら、そこからは居住の問題が生じる。はたして、この町にはそれを吸収する力あるのだろうか。

2.ブトオール市における移住形態及びスケンバシの歴史的な背景：

前章ではブトオール市の社会及び人口などを述べてきたが、本節では同市の急激な都市化による、人口増加の結果生じた問題を取り扱う。この町はおもに移住者からなりたっているが、正規の住民の大部分は親の世代にこの地域にやってきている。

近年、この町には正規の住民としてではなく、勝手に空き地を占拠する人々（スケンバシ）が相当数存在している。ブトオール市の急激な人口増加は、このスケンバシの増加と連動している点が特徴的である。

ところで、この町に移住者及びスケンバシはどれぐらいいるか、信頼できる統計はない。ともあれ、スケンバシの問題は、ネパールの主な都市や南のタライ（平地）及び幹線国道沿いに

ブトオール市における「スケンバシ」

生じている事実ががます指摘できる。

この意味で、タライ地域に位置し、主な幹線道路が交差する交易センターであるブトオール市は、スケンバシ問題を考えるうえで格好の条件を備えている。本節では、ブトオール市の内務省及びSSSAから得られたデータを分析して、スケンバシ問題のあり方を考察してみたい。

先ず、住民のほとんどが移住であるブトオール市の場合、基本的な資料は移住者に関する統計であること言うまでもない。しかし、市役所及び行政機関に当たってみたが、残念なことに整備された統計を入手することはできなかった。そこで、わずかではあるが、内務省が各々の市村の役場に開設している、出生及び死亡、婚姻、移住の届けを出す窓口から収集した、流入流出人口に関するデータを使用したい(2-1)。

もうひとつは、Sukumbasi Samsya Samadhan Aayog (SSSA)(スケンバシ問題解決委員会)という政府の組織があり、スケンバシの問題の解決を目的として、空き地を占拠している人々の統計を取り調べ、然るべきスケンバシに土地を与えるという仕事をしている。ルパンデヒ郡にもSSSAがあり、そこからブトオール市におけるスケンバシに関するデータが得られる。本節2-2で使用するデータはこれである。

2-1.内務省ブトオール支部から入手した流入・流出人口に関するデータは次の通りである（表2-1,2-2）。

移住・婚姻・死亡に関するこの法は1970年代終わり頃成立したが、当初はその施行は厳格ではなかった。この法が厳格に施行されるようになったのは80年代の末からである。本市に関しては1989/90年以降のデータしか入手できなかった。内務省は各市村の役場に窓口を設けたが、国民の関心はあまりにも低く、登録する者は少なかった。80年代末その法律を厳しくしたことと、登録者数は上昇しているが、まだ登録は完全ではない。従って、内務省のこの統計から推定できる流入・流出人口は正確さの点で限界がある。

まず、ナグリクタ・プラマン・パトラ（国籍証明書）及び正式な住所が登録の条件としてある。ところが、ネパールの全国民が国籍証明書を持っているとは言えない（F.H.Gaige:1975を参照）。

従って、表2-1、2-2は移住届を出している者である。本市に1989年4月後半から1998年の4月前半までの流入してきた人口のうち、西部開発地区の山岳地帯や丘陵地帯を中心に移住してきていることは、この表(2-1)からも確認できる。具体的に述べれば、移入件数が一番多いのはグルミ郡（18.22%）、二番目はパルバ郡（17.83%）、三番目はシャンジャ郡（15.37%）で、はじめの二つ地域は同県にあり、最後の郡は西部開発の丘陵地帯に属している。東部地域のタライ地域に当たるジャバ郡、モロン郡、スンサリー郡などからの者が移入していることは確認される。一方、移入世帯数は1301世帯、5885人、移出世帯は457世帯、2196人である。

ところで、移入人口の約三分の一ぐらいは当市を去っている。流出先はタライを中心に郡内（55.8%）及び隣りの郡（タライのカピルヴァストゥ郡は流出世帯の3.71%及びナワルパラシ郡は22.32%）へ移住している。山岳地帯や丘陵地帯へ移住していくという傾向はほとんど見られない。ところで、カトマンドゥ盆地に28世帯（132人）が移住している。第三世界では農村か

ら都市へ移住するというのが定説であるが、この地域においては、都市から周辺の地域（ブトオール市ほど開発されていない）へ移動しているので、第三世界一般の傾向とは異なるパターンを示している。これは都市の拡大化及び拡散化の進行と説明できよう。

この都市の拡大化及び拡散化の進行の理由として、調査中の聞き取りによれば、市内の土地の価格があまりにも上昇し、そこに住むより土地を売却して、離れたところに行けば広い土地を安く手に入れることができ、耕すこともできるからであるという。

移住してきた年別に見ると、移住件数は1989~93年までは増減しながら1993~98年の間に段々と増加している。これで、移住件数が増加していること、あるいは内務省の支部に届けを出す意識が高まったことを確認できよう。ともあれ、今後ブトオール市への移住者はいよいよ増加することを推測できる。そして、これらの者は今後どのように定住していくのか、興味深い点である。

2-2. 本節ではスケンバシを中心として特に、SSSAのデータを分析しながら述べていきたい。さて、ここでブトオール市の主な参考資料²⁵に基づくと、ブトオール市には広大なAbaidh Basti(スケンバシ居住区)がある。森林改善委員会のブトオール局によれば、1987年のスケンバシ居住区の世帯数は、ジョティ・ナガル(130世帯)、ラクシミー・ナガル(172世帯)、ラーム・ナガル(185世帯)、シヴァ・ナガル(524世帯)、ディープ・ナガル(1016世帯)である。それらの合計は2027世帯で、一世帯当たりの人口6人とすれば全体で、およそ1万2000人なる。これは本市の総人口の31%に当たる。ところで、ブトオール市の一一番古いスケンバシ地域はジョティ・ナガルである。1969年の調査以前からこの地域にはスケンバシが存在していた。ジョティ・ナガルは元々パルバ郡に属していたが、河川の路に伴って郡境が設定し直され、ツレー山脈南部の地域はルパンデヒー郡になった。これによってジョティ・ナガルも、ルパンデヒー郡のブトオール市に編入された。ところで、パルバ郡が測量事業の対象になったにもかかわらず、ジョティ・ナガルには測量は及ばなかった。その当時ジョティ・ナガルの130世帯中54%は臨時の小屋、41%の世帯は屋根にシートを張った構造の家、5%くらいがコンクリート・レンガ構造の家に住んでいた。ラクシミー・ナガル地域はツレー山脈の丘陵地帯にあり、172世帯中44%は臨時の小屋、38%の世帯は屋根にシートを張った構造の家、18%くらいがコンクリート・レンガ構造の家に住んでいた。そして、東西幹線国道のブトオール～ナラヤヌ・ガートの部分が建設開始すると、1970年以降シヴァ・ナガルに入々居住し始め、最初は国道の建設に携わる労働者のコロニーであったが、その後、段々居住が進行し1987年には524世帯になった。その家屋の構造を見ると9%は臨時の小屋、84%の世帯は屋根にシートを張った構造、7%くらいがコンクリート・レンガ構造であった。つづいて取りあげるディープ・ナガル(1016世帯)はブトオール市の一一番大きなスケンバシ居住区であり、その家屋の内およそ81%は臨時の小屋、14%の世帯は屋根にシートを張った構造、4%くらいがコンクリート・レンガ構造の家、1%は瓦葺き構造であった。1981年の都市開発マスターplanの中でこの地域は行政地区として提案されていたが、1978/79年頃にこの地区はスケンバシに占拠されていた。ラーム・ナガルの居住区は東西幹線国道沿いにあり、これも1967年以降労働者のコロニーとして開発され

ブトオール市における「スケンバシ」

たものである。旧ブトオール町の東西幹線国道沿いにあるパカパニー居住区にも多くのスケンバシ世帯がほとんどは臨時的小屋に居住している。これらの居住区は政府から見れば違法なものである(Structure Plan:12-16, Final Report: 2.24-2.30, Pratibedan: 18)。

しかし、政府は過去に何回か土地を持たない層に土地を与えたことがある²⁶。さらに1990年に民主化運動成功後に、ネパール会議派(NC)政府は大地主をなくしてスケンバシに土地をあたえる土地改革を推進する農業政策を取った。ところが、国民の期待の高まりにもかかわらずNC政府の農業政策はなかなか進展しなかった。1994年に第二回総選挙後には、共産党(UML)政府が土地改革に際しては真っ先に全てのスケンバシに土地を与えるという方針を明らかにした²⁷。

この土地改革の結果、ルパンデエヒー郡スケンバシ・サマシャ・サマダン・アヨグ(SSA)²⁸の統轄下で、ブトオール市のスケンバシに急速に土地所有権が与えられた。このときは、当市だけで2724²⁹世帯に土地所有権が与えられた。ブトオール市の一世帯当たりの人数は平均4.8530人であるから土地を与えられた人口は1万3000人強になる。これは当市の総人口の25.97%を占める。

このように土地所有権が与えられたことで、スケンバシは消滅したのだろうか。実際には、2724世帯という相当数に土地が与えられたにもかかわらず、また少なからぬスケンバシが存在しているのである³⁰。これはスケンバシ全てに土地所有権が与えられなかったのか、あるいは、土地配布の状況を見て、新たにスケンバシが流入したのかを検討することにしよう。もし、配布しなかったとすれば、2724世帯だけに配布して、残りの者には何故配布しなかったのか。この背景にどのような動機があるのかは興味深いところである。

スケンバシ・サマシャ・サマダン・アヨグ(SSSA)によると、現在ブトオール市において土地所有権を配布されていない審査段階にあるスケンバシのデータがSSSAにあるが、それをベースにして分析してみよう（表2-3,2-4）。

それによると、ブトオール市の審査段階にあるスケンバシは全部で920世帯、4450人が存在する。職業別には次の表の通りである（表2-3）。

農業に従事している世帯はわずか1.52%（14世帯）にすぎない。商業は7.5%（69世帯）、運転手2.39%（22世帯）、失業者（職業なし）1.41%（13世帯）、職業を明示していない者12.06%（111世帯）、勤務は9.56%（88世帯）、裁縫は1.96%（18世帯）、職人3.59%（33世帯）、リキシャー夫2.28%（21世帯）、その他2.06%（19世帯）と一番多い職業は労働者で55.62%（512世帯）になる。

以上に述べた職業は、SSSAによると、商業の場合小規模（屋台や路上で店を出している者から正式に食堂や出店している者も含まれている）である。勤務は公務員や教職員や工場に勤めている者である。正式に言えば、給与生活者を指す。労働者は明白ではないが、日雇い労働者のようである。

出身地別に見ると（表2-4）、ほとんどが西部開発地域の丘陵地帯及び山岳地帯に集中している。具体的に一番多かった郡はパルバ郡が171（18.59%）世帯である。本市のなかで問題居住区へ移動したスケンバシが141（14.33%）世帯も存在していることは注目に値する。SSSAの解説によるとブトオール市に移住してきた当時は借家に生活し、その後機会を狙って公共地へ侵入した者か、あるいは定住民がその地区に侵入した者である。ところで、農村部から都市へ移

住するのが一般的なパターンであるが、少数ながら首都カトマンドゥ盆地からの移住者（16件80人）も存在するのも注目される。

3. 現地調査について：

本研究のために予備調査として、1997年3月1ヶ月弱、10月に1ヶ月強、そして本格的には1998年2月に2ヶ月弱ほど現地に滞在し、ブトオール市の情況を正確に把握すること目的に行行政（市レベル）の中心になっている市役所から資料（ほとんど開発計画についてしか保管していなかった）入手し、市長や地域住民と雑談して当市の開発やその他の問題について様々なことを理解することができた。それらを通じて最も私の関心をそそったのはスケンバシ問題であり、それを調査対象として研究することに決心したわけである。

ところで、SSSA（スケンバシ問題解決委員会）では郡単位のデータ（統計）から職員の協力を得て集めた本市に存在するスケンバシのデータは、1996年までのものしかないことが判明した。結局1998年2月から2ヶ月弱現地調査を行って、自分でデータを集めることにした。現地調査の際にSSSAのスケンバシについて経験の豊富な職員5人と大学生3人の協力を得て、私も含めて9人で、全部で9カ所のSSSAの施策対象に含まれいないスケンバシ居住区の統計を取ることにした。主に対象になった人々に質疑するという形で調査を行い、名前、家族人員、年齢、職業及び出身地と入市年代（特に本市に入った年代とスケンバシ居住区に住み着いた年代）についてを聞き取りをした、それについては後に述べてみたい。

前章ではブトオール市における移住形態やスケンバシのことについて述べたが、本章では、ブトオール市で行なった現地調査を中心に述べたい。特に、SSSAのデータに含まれていない新スケンバシのデータを分析しながら、彼らの日常生活について述べ、次にデータを総合的に考察してみたい。

3-1. スケンバシの出身地、入市年代、職業、今日中形態と生活状況：

ブトオール市に存在するスケンバシのうちSSSAの審査対象になったスケンバシ以外にもスケンバシが存在する。彼らを調査対象として、統計を取った。その結果は次の通りである。

表3から分かるのは、代表的な職業は労働者（就労職種は多様である）だということである。労働者は日雇い労働者及び不定期労働従事者を指す。つづいて多いのは勤務であるが、公務員及び会社の社員から工場の労働者まで含まれているから、1つのカテゴリーの中で理解するのは難しい。ともあれ、ここでは勤務を俸給生活者としておこう。ネパールの代表的な産業である農業に従事する者がほとんどいるのは注意してよい。そして、SSSAのデータによれば農業に就事する者は14件であるが、私の現地調査では10件にも満たなかった。農業を行えるほどの占拠可能地は減少しているのである。

空き地を占拠した年を見ると、私の調査では1955年の一件が最も古い。その一件はSSSAから土地所有権を与えたときにも対象にならなかっただし、審査段階のリストにも含まれなかっただ。年間占拠数は1980年代初頭より78件から10件までのあいだに増減しながら推移し、1997年には515件に急激に増加した³²。また、現地調査の対象になっている全1265世帯（4551人）中、実際

ブトオール市における「スケンバシ」

にその場で生活しているのは918世帯に過ぎない事実も注目しなければならない。つまり、347³³世帯が土地を占拠しているにもかかわらず、そこには居住していないのである。

出身地別で見ると西部開発地区のグルミ、バルパ、シャンジャのような丘陵地帯出身の者が圧倒的に多い。ネパールでは山岳地帯から都市や平地へ移住することが一般的である、ブトオールのケースにはチトワン、カピルヴァストゥ、ナワルパラシのようなタライ地帯からの移住者や郡内からの移住者も少なからず存在している。

さて、なぜスケンバシになったかについて現地の人々（スケンバシ）の声を聞いたところ、圧倒的に多かったのは経済的に農村部で生活を維持することが困難になり、やむを得ず仕事を求めてブトオール市にやって来たという回答であった。換言すれば、ブトオール市への流入は、雇用目的型の移住といえよう。

ところで、ネパールでは相続による財産の分割制度が存在しており、息子全員に財産を分配しなくてはならない。その結果、農地は細分化され、農業だけでは生計が立てられなくなつて移住をせざるを得ないことになる。同様なケースは本市のスケンバシの間でもいくつか見られた。

調査中に聞いた、スケンバシ居住区の人々の話によると、故郷を離れてまず、ブトオール市で借家に生活していたが、機会を狙って公共地を占拠した者もいれば、親戚や同村の人々を通じて一気にスケンバシ居住区に住むようになった者いる。

ブトオール市ではSSSAが対策を講じていないスケンバシ、つまり私の現地調査の対象になったスケンバシの居住区は9カ所³⁴あった。第4地区に4つ、第13地区に2つ、第5,8,15地区に各1つある。規模を見ると、第13地区的P地区（ティナウ川の東部川沿い）とM地区（ティナウ川の真ん中）は、前者は713世帯（2503人）、後者は190世帯（437世帯）である。第4地区的4つのスケンバシ地区は、国道を挟んでその周辺の斜面や川沿いに生活している234世帯（1012人）からなる。第5地区的C地区（国道と川沿いの斜面）には62世帯（268人）、第8地区的T地区（季節的な川沿い）には28世帯（140人）、第15地区的J地区（斜面）には38世帯（268人）が生活している。

それぞれのスケンバシ地区について簡単に述べてみたい。

一番大規模で新しいスケンバシ地区はP地区で、そこには713世帯が存在するが、実際に人々が生活しているのは506世帯だけであり、残りの207世帯はそこには生活せず、土地だけを確保している。この地区には1997年3月後半から占拠し始めたのであるが、調査を行った時点（1998年3月2日）までの1年たらずのあいだに、すでにこれほどの数字に達していたのである。境界は東部と北部が私用地、南部が森林局の土地、西部がティナウ川に接し、川の跡地である。この地域の地域住民の協力によって、川側に堤防を建設し、3つの寺院が建設された。1998年2月頃には私立小学校も設立された。

この地区には、住民たちは一つ組織³⁵を設立し、その下に9つ小組織が設けられ、地域の管理をしているが、正式に合法団体として登録する動きはみられない。この地域の家屋構造をみると、竹、草、などの建材を使用した小屋が一般的であって、調査中、煉瓦や石造りの家が建設されているのを何カ所でみかけた。しかし、生活のための最低限の基盤である水道、電気、ト

イレが整備されていない現状である。

地域住民（P地区の人々）によると、ス Kunバシとして占拠する者大部分が、他の場所に土地をもちらながら、収入³⁶の機会を狙ってここを占拠しているようであった。真のス Kunバシは過半数にすぎない。実際に、数は少なかったが、報酬を得て、他人のために土地を占拠する者も調査中に現れたのである。

職種は様々であるが、半数以上（272世帯、1345人）が労働者で、次に俸給生活者が来る。その次は、交通関係者であるが、農業に従事しているのは5世帯（31人）のみである。しかし、調査地に農耕地は存在しなかったが、他の地域に農業者として働いているかも知れない。

出身地で一番多かったのは隣のパルバ郡で77世帯（392人）、次のゲルミ郡は61世帯（328人）である。

他のス Kunバシ居住区の状態も似たりよったりであるが、P地区に比べ、本物のス Kunバシが多くみられる。M地区とC地区を別にすれば、組織化には至っていない。職種はほぼ似ているが、農業に従事している者は皆無である。そして、P地区とは異なり、公共地を占拠した年代はス Kunバシ居住区によって違いがあるが、流一番古い1955年一件を除くとほとんど80年代と90年代の占拠である。

ところで、M地区の場合は上記に述べたこととは異り、生活パターンが特徴的である。M居住区では1985-6年頃に3世帯（15人）が占拠したのが最初であり、1995年には急増して72世帯（361人）が占拠した。全世帯（190）のうち実際に住んでいるのは86世帯だけである。この居住区は、ティナウ川に囲まれた島のような場所である。そこへ行くためには川を渡ることになるが、橋はない。雨期になると、この居住区の人々は別のところに移り住むが、調査が行った時期は乾期だったにもかかわらず、過半数以上が不在世帯主であった。

さて、ブトオール市のス Kunバシの日常生活であるが、ほとんどの人は川沿いや山の斜面のようなどころで暮らしている。彼らの生活は日の出とともに始まり、ティナウ川³⁷で採石（大きい石をハンマーで叩く）の仕事をしている。そこで働くのに年齢制限はない。5,6才子供から74才の老人までが労働している。彼らの賃金は月給や日当では支払われない。仕事量によって支払われる出来高払いである。おもに、大人の男性は大石を取るために穴を掘り、そこから出る石を女性と子供が集めるという分業形態がうまく機能している。だいたい午後3,4時頃になると、まだ仕事している人もいれば、男女に関係なく、もう酒を飲みだしているものもいる。飲酒は彼らにとって一番の娯楽品である。電気も水道もトイレ³⁸もない家に生活をし、日没になると、彼らの一日は終わり、朝は早い。

ここで、観察できたのは、彼らの結婚年齢があまりにも低いことである。何人かの女性は12,13才で結婚していた。そして、子供の数は多い³⁹。学校に通う子供は少数であり、大部分の子供は親とともに労働している。

ところで、南アジアといえばカースト制度が厳しいというイメージがある。しかし、ここでみる限り、ブラフマンも、下位カースト（ジャート）であるサルキ、ダマイ、スナルなども、同じ職場、同じ地区で生活し、同じ水道を利用しているが、とくに問題にはなっていない⁴⁰。下位カーストのあいだでは教育受けている者を先頭に、組織化しようという動きが見られる⁴¹。

ブトオール市における「スケンバシ」

ここで採れた石を受け取りに来る業者はネパール人ではなく、インド人でゴラク・プールからやって来る。現地の下請業者が仲介の役割を果たし、労働者の面倒をみると同時に、インド人業者の窓口にもなっている。インド人労働者も見受けられる。業者に聞いたところ、「現地の人々だけでは仕事を追いつかないので、インドから労働者を連れてきて仕事をやらせている」と言うことだった。

ところで、このような絶対的貧困層が生きのびようとしている姿を見た私には、SSSAを訪れるスケンバシはとても同じスケンバシだとは思えなかった。現場のスケンバシは自分の身体を隠すのが精一杯という服装だった。それに対して、SSSAを訪れるスケンバシはバイクで乗りつけ、ブランド品を着こみ、金のネックレスや腕輪をしていたのである⁴²。彼らがSSSAで交わる話は「なぜ土地所有権が与えられなかったのか、いつ所有権を与えるのか」ということだった。また次のような話も聞いた。「スケンバシから土地を買ったが、土地の所有権をまだもらえていない。いつ所有権がもらえるだろう⁴³」。SSSAに集まる「スケンバシ」は、成功したスケンバシか、「スケンバシ」とは縁もゆかりもないエリート層の人間であるようだ。採石現場にいたようなスケンバシはSSSAにはけっして来なかつたのである。貧困にあえぎ、本当に援助や相互扶助が必要なスケンバシには、自分たちの情況を開示しようとする余裕すらないように思われる。

おわりに

ネパール全体とブトオール市の人口について比較し、つづいてスケンバシについてSSSAのデータと現地調査から得られたデータを比較してみたい。

ネパールの人口が1971-81年の間に毎年2.66%の伸び率で増加しているのに対して、ブトオール市では同期間の増加率は5.87%である。1981-91年は前者2.1%に対して後者6.97%であった。こうした数字上から、本市の人口は急激に増加していることが理解できる。人口増加の理由は様々であるが、これは自然増だけとはいはず、都市の拡大やそれに伴う移住を考慮にいれなければならない。

移住に関して、国勢調査では郡あるいは開発地区単位しか表示されていないから、都市単位の比較は不可能である。移住についても本市の場合、過去10年に満たないデータしかなかった。その統計からは、ブトオール市の入市・出市について読みとれるとともに、郡内移住についても状況を読みとることが可能である。しかし、国勢調査では郡内移住について述べていないから、比較の対象にするのは困難である。また、職業に関してなにも述べていないから、ここで問題にするのはブトオール市における正式的な移住者の移住年代や出身地だけに限定されることになる。

今まで研究者の間では移住の主な原因を農業に関連させて論じることが多い⁴⁴。ところで、ブトオール市の場合はどうなっているか。SSSAのデータでは、14世帯、現地調査では5世帯、両者をあわせると19世帯が農業従事者である。これはスケンバシ全世帯のわずか0.87%にすぎない。従って、ブトオール市のスケンバシは農業を目的として移住してきたとはいえないでの

ある。労働者が圧倒的に多いから、就業目的で移住してきたといってよいのである。

さて、SSSAのデータでは、スケンバシのなかにブトオール市内を移動した141世帯が入っているが、現地調査では同様な者は25世帯しか存在せず、そのうちわずか4世帯だけが本市生まれの者で、残り者は移住してまず、借家で生活し、後にスケンバシ居住区に入ったという。SSSAのデータに現れた141世帯の実情については確認をとることができなかった。そして、現地調査では、347世帯の空白な世帯があったが、SSSAのデータでは、そのような世帯がまったく見られなかった。政府が対策としてスケンバシに土地所有権を与えるとき、空白世帯をどうのように扱うかは興味深いところである。

すでに述べたように、政府がスケンバシ問題解決のために土地所有権を与えた時期を分析すると、ほとんど選挙前になっている⁴⁵。スケンバシ問題は政治化されつつある傾向がうかがわれる。官報によると、「スケンバシ（無計画居住者）とは、自分や自分の家族の名義で他に家や土地の所有する者、あるいは所有していない者で、1994年の中間選挙を行なった時点で当該地域の選挙名簿に自分の名前が登録され、選挙の日付までに政府のや公共地で生活をしている者と考えるべきである(Nepal Rajpatra,1997:1-2)」と述べられている。そして、有権者とは選挙法(1990年)に基づくと、選挙名簿項目の第2条に村や市の領域内に定住している者、あるいは選挙委員会が指定した日付までに最低1年間滞在し、18才になったネパール人である者を指示す。法律や官報の定義どおり、スケンバシと選挙（政治）の関連があることは確かである。データ（現地調査）で読みとれるように、1997年の地方選挙があった時期に急激に新スケンバシ地区(713世帯)を出来上がったことは、なによりの例証となるであろう。

ところで、シェウレ・シュタ氏が指摘したような、死亡者が出るほどスケンバシが激しい追い立てを受ける(Kalpan,P.F.&Shresta,N.R.,1982)ケースは、ブトオール市では最近あまり見られない。しかし、過去には追い立てを受けたケースもある(Ojha,D.P.,1983)⁴⁶。時代が変わって、1990年の民主化成功以降、国民に自由という意識が高まり、もしも追い立てられる事件が起きたら人権問題が生じるであろう。しかし、調査にも本市のあるスケンバシ居住区において新しい3棟が市の職員によって崩壊される事件が起きた⁴⁷。このような事件は一件しか見ることはできなかったが、地域住民に聞いたところ、はじめてこんな経験をしたという人が多かった。ある年輩の人の話によると、過去に追い立てでは日常茶飯に行われたが、90年代に入ってからこのようないことは珍しいことになったとのことだった。

ネパールの場合、スケンバシ問題は開発・移住から生じた問題といって過言ではない。時代とともにスケンバシの問題が変化しつつあることは事実である。例えば、国家の収入（税金）を増加させるために、今世紀前半までに密林地帯を開拓して、木材を輸出した。また、農耕地は無償で与え、はじめの2年間は免税という計画を立てて、農業生産力を高めるために国民を励ました(Regmi,M.C.,1979)。それに対して、今世紀後半になると、開発理論に従って、急激に増加している人口の配分、自然災害で被害を受けた住民を救済するために再定住計画という戦略をとってきたが、80年代後半にはいるとタライ地帯の開拓の限界が来たためか、計画自体があまり成功しなかったためか(Also see Thapa & Nepali,1980,Shresta,N.R.,1990,Kansakar,1985)再定住計画は打ち切りになった。しかし、再定住計画⁴⁸が打ち切られたとしても、山岳・丘陵地

帯からの人口の流れはとどまらないし、今後もとどまることにはなるまい。

このような環境の中で生じた「スケンバシ問題」はすぐ解決できるかという問い合わせに答えるのはむずかしい。しかしながら、現代文明は、科学・技術の発達、通信、交通が進歩したおかげで、情報の伝達がよりよくなり、人々の動きも激しくなった。移住の原則によると、人々はよりよい生活（豊）を求めて移住する。だから、「スケンバシ」も言葉の意味通りSukkha（幸福）を求めてくる者である。しかし、言葉も時代によって変化するものであり、現代文明の中に生き残っているSukkha（幸福）の標準に満たすのは、「スケンバシ」にとってまだほど遠い目標なのである。ところで、Sukkha（幸福）を求めて来ている「スケンバシ」に対して、問題の解決をめざして取られた政策は、彼らに土地所有権を与えることだけであった。この政策は、ある時代にはよい政策だったといえるかも知れない。しかし、現在はスケンバシが土地を入手しようとしているのか、仕事を要求しているのかを考える時期に来ているのではなかろうか。

本研究は、農耕地が少ないという特質をもつ地方都市のマクロ的な調査であり、ネパール全体にかかる典型的な事例とはいえないかもしれない。しかし、人口増加によって農耕地が減少していくことは間違いない。そして、今までこのような研究が欠如しているために、比較研究を行なう可能すらない現状である。第三世界では、都市を中心に人口が集中するという現象がおきており、今後、都市間の比較研究が要求されることになろう。

注：

- 1 Zone,District,Villageは県、郡、村と訳されるのが一般である。日本の県郡よりはやや規模が大きくなるが、この論文でも踏襲することにする。
- 2 Unpublished final data CBS, 1991 Census in Final Report.
- 3 Lamsal,Hari., ed., 2053(1995-6)Butwal Smarika , Butwal Nagar Palika, pp.6
- 4 Final Report, October 1993, Town Profile of Butwal Municipality, Ministry of Housing and Physical Planning, Town Development Fund Board and Butwal Municipality.2.1
- 5 周辺地域からこの地域に人や物が集まる場所として意味付けるこの解釈は本論文のコンテクストでは適切なものと思われる。
- 6 Lamsal,Hari., ed., op. cit., p.1.
- 7 しかし、18世紀末にKirkpatrickがButwalをBootoulあるいはBootwalと呼んでいたから、この説は成り立たない。
- 8 Sharma, Bal Chandra, V.S.2033(1976), Nepal Ko Yetihasik Ruparekha, Krisna Kumari Devi, Varanasi, p.201
Ghimire, B.P., V.S.1987, Palpa Rajyako Itihas, Bhag-1, Ghimire Prakashan, Chitawan, p.40
- 9 歴史的に年代は明確ではないが、V.S.1987年（1930年）にティナウ川にプラタブ・シャムシェルが建設したという吊橋には、その事実を記す刻文があるので、年代は適切であると考えられる。（Lamsal,Hari., ed., 2053(1995-6) p. 57）。
- 10 Final Report, op. cit., p.2.1.

- 1 1 Gurung, S.B., 1987, Urban Localities Along the Siddharth Highway in Gandaki Growth Axis, The Journal Of Development and Administratite Studies, Vol. 9, No. 1, CEDA, Tribhuvan University, Kathmandu, Nepal
- 1 2 Central Bureau of Statistics, His Majesty Government, 1997, Statistical Year Book of Nepal, C.B.S., p.10.に世帯数は9195世帯としているが、ブトオール市の地区別世帯数を計算すると、9196世帯になるから、それを用いることにする。
- 1 3 Final Report, op. cit., p.2.5.
- 1 4 Pratibedan, 2054(1997), Yekikrit Karyamulak Yojana (Pratham Charan) Butwal Nagarpalika, U.D.L.I./GTZ Tatha Butwal Nagarpalika, p.6.
- 1 5 1995年ブトオール市による統計を参照。
- 1 6 短期滞在者の中にスケンバシを含めているかどうかは、残念ながら明確な返事をもらえなかった。
- 1 7 Pratibedan, 2054(1997), op. cit., p.7
- 1 8 このデータは、Final Report, 1993, p.2.27に表示されているパーセンテージとPratibedan, 2054(1997), p.7に表示されている面積をベースにして作成したものである。Final Reportには計算上のミスがあるからである。
- 1 9 Final Report, 1993, op. cit., p.2.3
- 2 0 この表には、民族（ジャーティ）、カースト（ジャート）、宗教、コミュニティーなど、性格の異なる集団が列記されている。これを総称する適当な用語を見出すことは困難である。そこで、ここでは依拠した資料の用語に従って、エスニック・グループを便宜的に使用した。
- 2 1 センサスでは表記されているとおりであるが、実際にはネパーリ化が進んでおり、同一民族でもその民族語を話せないと言う状態におかれているケースが多い。例えば、ネワールの場合、親がネワーリ語が話せても子供は話せるとは限らない。なぜなら、学校教育及び公用語としてネパーリが利用されており、一般的にもネパーリを使用する機会が多いからである。従って、親が子供に母語よりネパーリを押しつける傾向にある。
- 2 2 人口1万5737人のうち10才か14才までの人口は2893人で、経済的に活動しているのは582人である。そして、残りの経済的に活動していない者は無職か、失業者かであるが、その区別は明示されていない。
- 2 3 データの不足ではっきりとは言えないが、T村が合併したために農業人口多少増加しているかもしれない。
- 2 4 Gurung,H.,1989, Reginal Patterns of Migration in Nepal, Paper of the East-West Population Institute. p.13
- 2 5 Butwal Structure Plan 1988-2003, Town Profile of Butwal Municipality, Pratibedan 2054(Report 1997/98)の参考資料のこと。
- 2 6 筆者が子供の頃政府がキルティープル（カトマンドゥ盆地）にスケンバシ救済の名目で土地所有権を与えたことを記憶している。しかし、配布された土地は土地なし層ではな

- くてほとんど周辺地域の土地所有層が子供の名義にして、所有したという事実がある。
- 2 7 ケシャブ・ラル・マハルジャン、1997年、「民主化後の土地改革」、石井溥（編）、アジア読本『ネパール』 p 37-45。
- 2 8 当時、この機関の責任者には、UMLに属し、次の地方選挙で市長選挙に出馬し、当選した人物である。この影響で、UMLの運動家である人物が（特に機関に関する）何人か市会議員に当選したことがある。
- 2 9 この数字は筆者独自にこの機関の職員を通して得たものである。
- 3 0 （総人口1991年B市+T村）/全世帯数（B+T）
- 3 1 『今後チディヤ・コラーに約70世帯、第2地区のダンダーによそ6世帯、国道沿い、第4地区フールバリーダンダ・トールに少数、第8地区川の向こう側に10世帯、第14地区に約70世帯がスケンバシがいる(Pratibedan)』。このレポートが1997年の半ば頃に、地方選挙が終えて、新市長（先ほどのべた人物）のもとで作成されたものである。
- 3 2 第13地区プラガティ・ナガルでは515世帯の人々は現にその場所に生活している。しかし、実際に同年（1997年）土地だけを確保しているが、その場所に生活しておらず、帳簿上だけ占拠している世帯は207世帯である。
- 3 3 347世帯は土地を占拠し、4本の竹柱で土地の境界線はしっかりとしているが、実際には誰も住んでいない世帯である。周辺の住民に聞いたが口が堅い。しかし、噂によると影には政治家及び有力者がついているようなニュアンスがある。
- 3 4 全体として10カ所あった。1カ所の約56世帯の人々は市役所の掃除夫として働いている。市役所の許可を得て住んでいるのかどうかは明白ではないが、彼らは自分たちをスケンバシと名乗っている。今回の調査対象としては彼らは除外し、9カ所だけ取り扱うこととした。
- 3 5 この組織は彼らのまとめ役を果たしているが、正式に政府に登録された組織ではない。このような組織は9カ所の内3カ所しか見られないから、他のスケンバシ居住区では、住民同士のまとまりがあまり見られないと言える。
- 3 6 1970年代後半から土地が不足し、かつ商品化して価値が上がり、「人々の意識は何をおいても土地の確保に集中し（小林、1992:77）」、ただでもらえる土地を占拠して売却し、金儲けの手っ取り早い手段にしているようだ。
- 3 7 ティナウ川の東の方は年中水が流れ、日常現地住民の沐浴所や洗濯場や火葬場になっている。ところで、西の方は、乾期だったので、川に水はなく、人々（特にスケンバシ）が採石をする職場であった。国の経済を支える外貨獲得に子供も老人も、きつい仕事をして貢献しているにもかかわらず、彼らは違法な存在と見なされている。ネパール人だけではなく、インド人労働者や業者にも仕事の機会を与えていた採石業は、両国のために役立っている「国際協力事業」なのである。
- 3 8 一般的にネパールの農村部では、現代的な最低限の設備がないというのは珍しいことではないが、現在都市や地方都市にはこのような設備が整備されているにもかかわらず、プトオール市のスケンバシ居住区では述べた通りの状態である。

- 3 9 スケンバシ地域は一般的に違法住宅地と見なされ、電気、水道、下水は整備はされていない。娯楽としては、飲酒か、子作りにはげむことしかない。人口増加が激しいネパールでは、テレビやラジオや新聞で家族計画がさかんに宣伝されているが、残念なことに、ブトオールの町の現実は、こうしたメッセージがまったく受けとめられていないことを物語っている。
- 4 0 滞在期間が1ヶ月半という短期だったために、観察したかぎりではカースト意識は表面に出なかった。しかし、人々の深層にはカースト（ジャート）意識があるかも知れない。ところで、ネパーイという名字をもつ人に聞いたところ、実際には下位カーストのサルキだった。ネパーイという名字が多く存在し、下位カーストであることを明示する名字を別の名字に変える現象が下位カーストに起こっている。
- 4 1 調査中、ウットピディト・ダリト・ジャーティー・サンガタン（下位職業カーストの組織）のために、下位カースト出身の学校の教員が統計を集める努力をしてた。だが、彼の話を聞いてみると、この組織も実際に下位カーストの生活改善よりも政治的な背景を強くもつ組織であった。
- 4 2 ネパール人の平均収入（計算上5000ルピーとする）でバイク一台（合弁会社で製造されるインド製バイクの値段は1998年11月現在8万4000ルピー「米\$1=67.7ルピー前後」）を買うとすれば、飲まず喫わざでも16.8ヶ月かかることになる。
- 4 3 官報(Rajapatra)、1997年11月{B.S.2054,Mangsr,9}第47編40条(Ka)の10によると、スケンバシに与えられた土地は10年間売買や譲渡が禁じられている(HMG,1997:7)。
- 4 4 Gurung,H.,1989,Regmi,M.C.,1979,Dahal,D.R.,1977,Thapa&Nepali,1980,Conway&Shrestha,1981を参照
- 4 5 ネパール会議派(NC)政府が1992年（地方選挙前）に全国で1500世帯、共産党(UML)政府が1994年（9ヶ月間政権を握って国会を解散して総選挙しようとしたが実現できなかつた）に5万8000世帯のスケンバシに土地所有権を与えた。現在の連立政権は来年5月頃総選挙を行う予定でいるから、このごろ毎日のように新聞記事ではスケンバシのことが取りあげられ、全国的にスケンバシに土地所有権が与えられている。
- 4 6 ブトオール市の森林地域を占拠した1万8000人住民が、1980年6月、7,8ヶ月のあいだに徹底的に追い立てを受けた(Gorkhapatra,June6,1980 in Ojha,1983:41)。
- 4 7 1998年3月12日午前11時半頃、第13地区のスケンバシ居住区では、ホリー祭で皆喜んで色水をかけて遊んでいるとき、市の職員たちがいきなり来て新築（竹とシートだけ）の3棟を破壊し、建材は車につんでもち去った。3棟の住人たちには抵抗したが、及ばなかつた。市の職員によると、「私たちにしても好きでやっているわけではないが、上の命令だから仕方がない。こうすることしかできない。もし、何か文句があれば、市役所へ来て上の人にいってほしい」と述べていた。
- 4 8 再定住計画はブトオール市では実施されたことがないということを注意しておきたい。

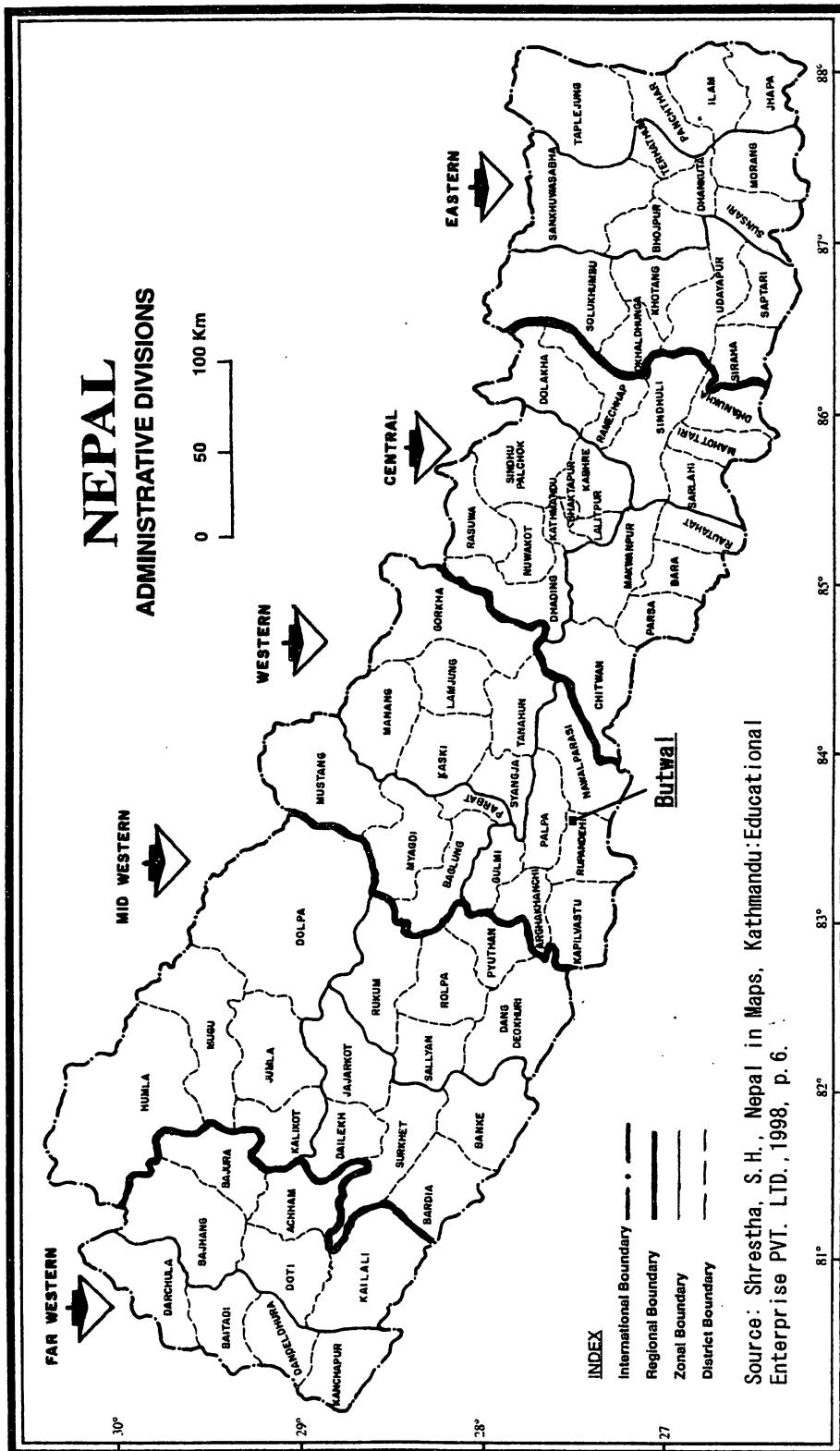


Figure. 1

ブトオール市における「スケンバシ」

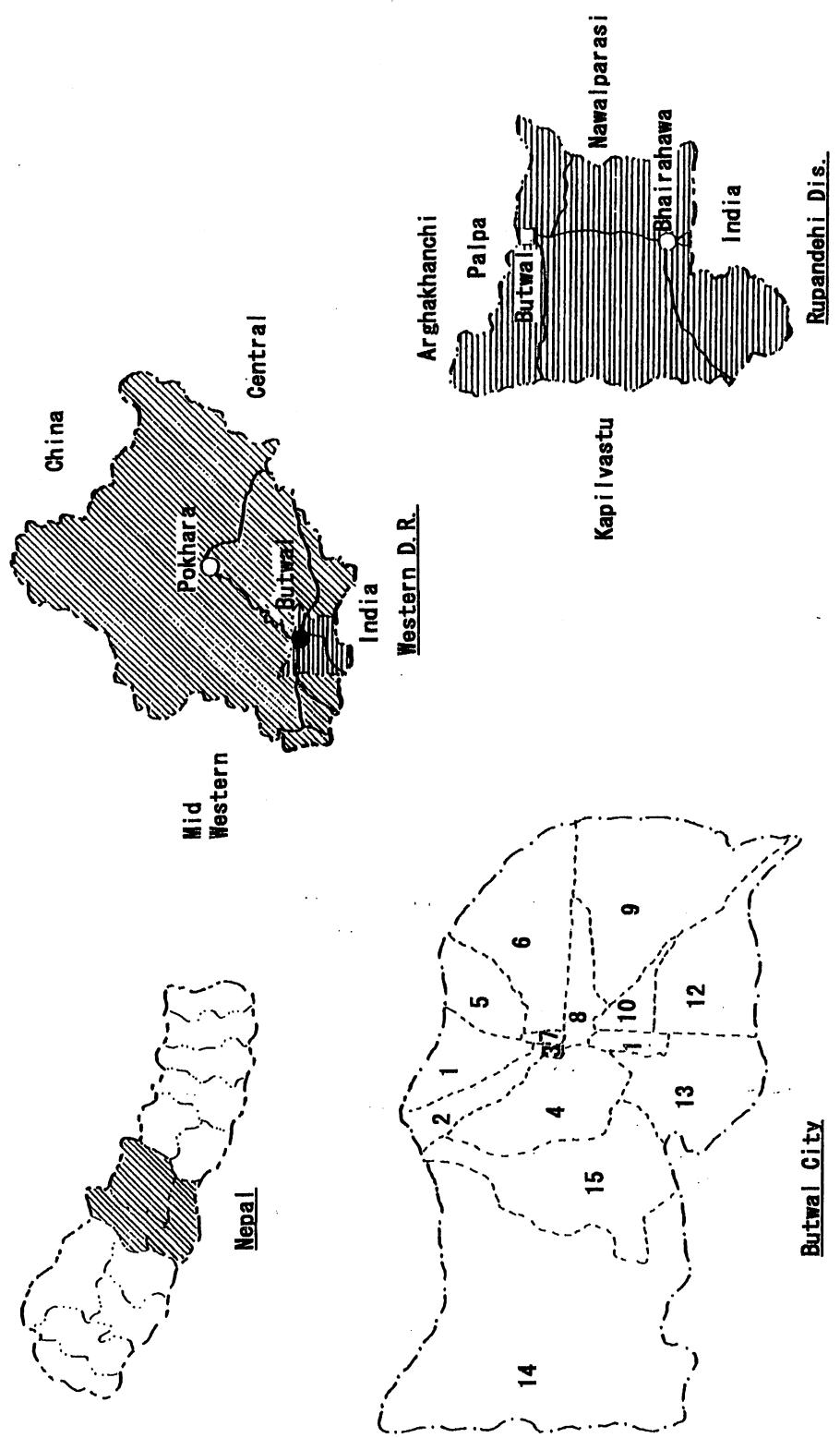


Figure. 2

Source: Ekikrit Kryamulak Yojana (United Development Plan), Butwal City: U.D.L.E./G.T.Z. & Butwal City, 1996.

ブトオール市における「スケンバシ」

Table 1-1.Ward Wise B.N.P.

Ward No.	H.H.	Population	Male	Female
1	145	871	445	426
2	288	1545	788	757
3	289	1513	810	703
4	632	3079	1557	1522
5	1248	5548	2867	2681
6	1398	6707	3625	3082
7	301	1636	862	774
8	3869	18159	9435	8724
9	1026	5214	2604	2610
Total	9196	44272	22993	21279

Source:Unpublished final data CBS, 1991 Census

Table 1-2. Tam Nagar VDC

Ward No.	H.H.	Population	Male	Female
1	108	542	241	301
2	147	761	362	399
3	70	425	191	234
4	135	647	317	330
5	90	487	225	262
6	127	688	299	389
7	131	613	312	301
8	87	498	254	244
9	234	1125	555	570
Total	1129	5786	2756	3030

Source: Unpublished final data CBS, 1991 Census

Table: 1-3.Ward-wise Population of BNP.

Ward No.	H. H.	Population	Male	Female
1	145	871	445	426
2	288	1545	788	757
3	289	1513	810	703
4	632	3079	1557	1522
5	1248	5548	2867	2681
6	1398	6707	3625	3082
7	301	1636	862	774
8	1861	8734	4538	4196
9	967	4540	2359	2181
10	604	2833	1472	1361
11	437	2052	1066	986
12	437	2221	1109	1112
13	589	2993	1495	1498
14	550	2862	1336	1526
15	579	2924	1420	1504
Total	10325	50058	25749	24309

Source:Final Report,
1993,p.2.4

Table:1-4.Population in BNP, 1994

Ward No.	H.H.	Population	Male	Female	Av.Pop /H.H.
1	102	1021	550	471	10.00
2	151	1044	605	439	6.91
3	177	1191	607	584	6.73
4	584	3511	1750	1761	6.01
5	929	7352	3612	3740	7.91
6	1013	5733	2942	2791	5.66
7	172	1555	809	746	9.04
8	693	3935	2024	1911	5.68
9	1790	4685	2387	2298	2.62
10	855	6217	3193	3024	7.27
11	580	3275	1671	1604	5.65
12	488	2906	1430	1476	5.95
13	564	2832	1435	1397	5.00
14	643	3694	1920	1774	5.74
15	646	3924	1974	1950	6.07
Total	9387	52875	26909	25966	5.63
Temp. Res.		8932			
Total		61807			

Source: Butwal Nagar Palika

Table:1-5. Economically Active Population 10 years of Age & above by major occupation group.

Occupation Group	1991/No.	%	1981/No.	%
Professional Technical Workers	583	5.0	175	2.6
Administration Workers	231	2.0	71	1.1
Clerical Workers	581	5.0	446	6.6
Sales Workers	3012	25.9	1282	19.1
Service Workers	2577	22.1	155	2.3
Farming & Fishing Workers	830	7.1	2690	40.0
Production Labour Workers	3050	26.2	1024	15.2
Occupation Not Stated	777	6.7	883	13.1
Total	11641	100.0	6726	100

Source : CBS 1991 and 1981 census, unpublished data. As per 1991 ward division(Final Report, 1993:2.18).

ブトオール市における「スケンバシ」

Table:2-1

Place	In -	Migration	Out-	Migration
	H.H.	Population	H.H.	Population
Arghakanchi	45	180		
Baglung	108	518		
Kathmandu.V.	11	35	32	149
Banka	4	12	7	30
Chitawan	19	76	7	28
Gorkha	5	19		
Gulmi	237	1138	1	3
Jhapa	5	32		
Kapilvastu	25	121	17	73
Kaski	23	85	4	13
Makawanpur	8	25	2	7
Mustang	5	23		
Myagdi	31	138		
Nawalparasi	81	391	102	516
Palpa	232	989	15	68
Parwat	67	337	2	6
Pyuthan	7	23		
Rupandehi	112	524	255	1263
Sunsari	5	17	1	3
Syanja	200	932	5	20
Tanahu	19	82		
Others	52	188	7	17
Total	1301	5885	457	2196

Table:2-2.

Year	In-	Migration	Out-	Migration
	H.H.	Population	H.H.	Population
1989/90	92	336	19	76
1990/91	104	443	21	90
1991/92	73	340	33	107
1992/93	57	246	26	127
1993/94	106	526	55	299
1994/95	117	565	68	344
1995/96	156	788	57	285
1996/97	289	1212	67	328
1997/98	307	1429	111	540
Total	1301	5885	457	2196

Source : Butwal Branch Office, Ministry of Home.

Table:2-4.

Occupation	H.H.	Population
Agriculture	14	79
Business	69	344
Driver	22	100
Job Less	13	50
Labour	512	2410
N.S.	111	577
Riksa Driver	21	92
Service	88	444
Tailor	18	86
Work Shop	33	168
Others	19	100
Total	920	4450

Source : SSSA, Rupandehi District, 1995~96.

Place	H.H.	Population
Arghakhanchi	32	150
Baglung	72	344
BNP	141	710
Chitawan	10	40
Rupandehi Dis.	35	172
Gulmi	140	713
Kaski	10	36
Myagdi	16	75
Nawalparasi	14	63
Palpa	171	807
Parwat	34	168
Pyuthan	10	43
Syanja	129	649
Tanahu	12	59
Kathmandu V.	16	80
Others	78	341
Total	920	4450

Table: 3.

Occupation	H.H.	Population.	Year	H.H.	Population.	Place	H.H.	Population.
Business	78	399	1983/84	53	245	Arghakanchi	25	121
Driver	38	184	1984/85	26	151	Baglung	83	484
Labor	583	2883	1986/87	34	174	BNP	25	122
N.A.	31	131	1987/88	32	160	Chitawan	16	74
NL	347	0	1988/89	59	287	Rupandehi	40	194
Service	123	629	1989/90	19	94	Gorkha	20	100
Work-Shop	21	107	1992/93	25	130	Gulmi	117	600
Others	44	218	1993/94	14	61	Kapilvastu	10	38
Total	1265	4551	1994/95	15	58	Kaski	19	90
			1995/96	78	383	Lamajung	10	46
			1996/97	10	55	Myagdi	15	71
			1997/98	515	2551	NA	88	394
			NA	4	25	NL	347	0
			NL	347	0	Nawalparasi	38	174
			Others	34	177	Palpa	150	781
			Total	1265	4551	Parwat	38	184
						Pyuthan	15	78
						Syanja	107	541
						Tanahu	19	100
						Others	83	409
						Total	1265	4551

Source: Field Study ,1998, Feb-March.

BNP= ブトオール市

• NA : Not available.

• NL : Not Living.

ブトオール市における「スクンバシ」



スクンバシ居住区の風景



スクンバシ居住区の働いている子供

参考文献

- Bhumisudhar tatha byabastha mantralaya, B.S.2053(1996), *Nepal Rajapatra*,46-6(Kha),H.M.G.:Kathmandu.
- Bhumisudhar tatha byabastha mantralaya, B.S.2054(1997), *Nepal Rajapatra*,47-40(Ka),H.M.G.:Kathmandu.
- Bista,B.B., 1994(Sixth Impression), *Fatalism and Development*, Orient Longman Limited:Calcutta.
- Blaikie, P., 1980, *Nepal in crisis*, New York: Oxford Press.
- Conway and Shrestha, 1981, *Causes and Consequences of Rural to Rural Migration in Nepal*, Bloomington, Department Of Geography,Indiana University.
- Dahal, D.R., et.al., 1977, *Land and migration in far-western Nepal*, Institute of Nepal and Asian Studies, Tribhuvan University: Kathmandu.
- Dahal, D.R., 1983, Economic development through indigenous means: a case of Indain migration in the Nepal Tarai, Contribution to Nepalese Studies ,Vol-11,No.1 T.U.: Kathmandu.
- Final Report, 1993, *Town Profile of Butwal Municipality*, Ministry of Housing and Physical Planning,Town Development Fund Board and Butwal Municipality
- Gaige, F., 1975, *Regionalism and National Unity in Nepal*, Vikas Publishig House.
- Ghimire, B.P., 1987(B.S.2045), *Palpa Rajyako Itihas*, Bhag-1, Ghimire Prakashan,Chitawan.
- Gurung, S.B., 1987, Urban Localities Along the Siddharth Highway in Gandaki Growth Axis, *The Journal Of Development and Administrative Studies*,Vol.9, No.1,CEDA,TribhuvanUniversity,Kathmandu.
- Gurung, H., 1989, *Regional Patterns of Migration in Nepal*, Paper of the East-West Population Institute.
- H.M.G., 1995(B.S.2053), *Nepal Ain Sangrah 2(kha)*, Kanun Kitab Byabastha Samiti: Kathmandu.
- Hagen, T., 1971,Nepal: *the kingdom of the Himalayas*, New Delhi: Oxford U. Press.
- Hagen, T., 1998, *Nepal*, Himal Books,Nepal. (Revised Edition).
- Kalpan, P.F. and Shrestha, N.R., 1982, Sukumbasi movement in Nepal: the fire from below, *Journal of Contemporary Asia*,Vol. 12
- Kansakar, V.B.S., 1985, Land resettlement policy as a population distribution strategy in Nepal, In L.A. Kosinski and K.M. Elahi, eds., *Population redistribution and South Asia*, Amsterdam: Reidal.
- Kantipur, 1998 Sep. 4.

- Kirkpatrick, Colonel, 1811, *An account of Kingdom of Nepaul, being the substance of observations made during a mission to that country, in year 1793.*, London: xx.
- Lamsal,Hari (ed.), 2053(1995-6), *Butwal Smarika , Butwal Nagar Palika.*
- National Planning Commission, 1995, *Population Monograph of Nepal*, HMG C.B.S.: Kathmandu
- National Planning Commission, 1995, *Statistical Year Book of Nepal – 1995*, HMG. C.B.S.: Kathmandu.
- National Planning Commission,1997, *Statistical Year Book of Nepal*, HMG C.B.S.: Kathmandu.
- Ojha, Durga P., 1982, *History of Land Settlement in Nepal Terai: Contribution to Nepalese Studies*, Vol-11, No.1 T.U.: Kathmandu.
- Pokharel, B.K., 1984(BS2040), *Nepali Brihat Shabdakosh*, Nepal Rajakiya Pragya Pratisthan, Kathmandu.
- Pratibedan, 1997(B.S.2054), *Yekikrit Karyamulak Yojana (Pratham Charan) Butwal Nagarpalika*, U.D.L.I./GTZ Tatha Butwal Nagarpalika.
- Regmi M.C., 1978, *Thatched & Stucco Palace*, Vikas Publishing House.
- Regmi, M.C., 1979, *Readings in Nepali Economic History*, Kishor Vidya Niketan.
- Sharma, Bal Chandra,1976(B.S.2033), *Nepal Ko Yetihasik Ruparekha*, Krisna Kumari Devi, Varanasi.
- Sharma,Hari Bhakta(Ed.), 1997, *Nepal District Profile* , National Research Associates: Kathmandu.
- Shrestha, Nanda R., 1988,A structural perspective on labour migration in underdeveloped countries, *Progress in Human Geography* 12(2), pp179-207.
- Shrestha, N.R., 1989,Frontier Settlement and Landlessness Among Hill Migrant in Nepal Tarai, *Annals of the Association of American Geographers*, 79(3), pp. 376-377.
- Shrestha, N.R., 1990, *Landlessness and Migration in Nepal*, Westview Press.
- Shrestha,S.M.& Joshi, S.K.,BS2048(1992), *Nepal Parichaya*, Akshalok Prakashan,Kathmandu.
- Thapa Y.S. and Nepali, R., 1980, *Migration And Resettlement In Nepal*,Chap.3,*Migration and resettlement, Rural-Urban Policies*, Vol.2, UNDP,ESCAP, Manila.
- Turner, R.L., 1931, *A Comparative Dictionary of Nepali Language*, London.
- 河邊宏(編)、1991、『開発途上国の人団移動』アジア経済研究所.
- 小林正夫、1992、「ネパールにおける経済開発と人口流動」『人文科学科紀要』第95巻人文地理学XI東京大学教養学部、pp.55-83
- 石井溥(編)、1997年、アジア読本『ネパール』河出書房新社.